

わけではないが、ニーバーの現実主義が注目を浴びた。

ニーバーは、宗教的にも政治的にも非常に言及のしやすい人物であり、その名前は読者には説明不要の一定の権威ある人物として論じられていると言える。

現代キリスト教における死後世界論の意義について

方 俊植

人間にとって、「死」は避けられない大きな事柄であり、また恐怖の対象でもある。

日常生活の中で、「死」に関して語ることは避けられる場合が多い。人々は「死」に対する恐怖を克服するために宗教に回心や帰依する場合も多いと言われる。キリスト教の場合も、「死後世界」、「死後の生命」、「永遠なる命」などは中心的な教義の一つであった。しかし、二〇世紀に入って生じてきた実存主義の影響や聖書学の発展によって、「死後世界」に関する議論は、神学的にあるいは教会においても無関心の中に葬られているように見える。本発表では、ジョン・ヒックの議論を中心に「死後世界」があることを信じながら行う信仰生活の意義や宗教的な観点から「死後世界」が持つ意義に関して検討を試みる。

ヒックの宗教思想の中で「死後世界」に関する議論は重要な論点の一つであって、ヒックを代表する思想―宗教的実在論、神義論、宗教多元主義の仮説―は「死後世界」の議論と密接な関係を持っている。まず、議論の出発点として「死」に関するヒックの見解であるが、ヒックは「死」を神からの贈り物として見なすことによって、「死」に関するこれまでの既存の観念

である、不気味あるいは恐怖の存在としては捉えない。そして、「死」は人間にとって眠りのようなものであると考える。また、「死」を人間が永遠な命を得るために霊的成長における一つの区切りとして捉えるのである。こうした理由は、伝統的に伝えられてきた「死」の概念(一回限りの生と死)では、生まれる時からの不平等を克服することができないからであると指摘している。すなわち、ヒックは人間が不完全な状態において創造されて、さまざまな試練を通して完全な形態―道徳的・霊的な人格の形成―に向かっていると考えているのである。こうした議論から、ヒックは「死後世界」に関して、「個人は一連の多数生命を経験しつつ、人間としての自己完成をめざして、つまり、神の子としての潜在可能性の実験を目指して、前進している」という一つの仮説を提示する。

言い換えれば、神との関係における個人の自己完成とは、キリスト教の伝統によると「救い」を意味する。勿論、ヒックは、他の宗教伝統においても自己完成は実現できるのであると見なすのであろう。要するに、ヒックの「死後世界」の議論は、人間における宗教的な伝統によって示唆されてきた方向へと収束するような、一つの可能な人類の未来図であると主張するのである。以上のような議論をヒックは、晩年の著書の中でより明確にする。

ヒックの主張は、われわれの「生」が信仰に基礎付けられれば、「人の生においてよいものすべては死によって、永遠に消しされることなどありえないことになる」ということを指摘している。すなわち、次の生とは、現在の意識的な自我の生まれ

変わりではなく、あらゆる遺伝子および環境的な状況によって形成される新たな個性である。ということは、われわれは、まるでリレーの走者のように、自分に任された時間において、充実な生を営むことによって、将来の霊的な完成に向けて貢献できるということを意味する。以上のように、ヒックが擁護しているのは、長い間、人間歴史の中で刻まれている人間の宗教性、その気質である。そして、その根本を支えるのが「宇宙的な楽観論」である。その中身は人間に対して多様な原因から訪れる様々な苦痛などを認め、自分が信じている宗教の教え―救い―にしたがうと、それらの苦痛は乗り越えられるということである。

今回の発表では、「死後世界」があることを信じながら行う信仰生活の意義や宗教的な観点から「死後世界」が持つ意義に関してある程度検討することはできた。

内観と悲哀

寺尾 寿芳

カトリック内観瞑想とは、浄土真宗秘事法門の「身調べ」を基礎に「していただいたこと、して返したこと、迷惑をかけたこと」の三点から自己の罪悪深重さを自覚する心理療法として吉本伊信が開発した内観法を藤原直達がかトリックの瞑想に適用したものである。方法論的には吉本内観法を踏襲するが、カトリックの霊性からミサを頂点に位置づける独自性もっている。その内観対象として死者が重要な位置を占め、そこに「復活」の人間学的理解を手がかりとした生者による「悲哀の仕

事」を見て取ることができるとしている。

新約学者の佐藤研はフロイトの喪の仕事を契機に復活を非合理的なヌミノーズ体験として理解し、そのなかで「悲哀の仕事」を特徴づけているが、筆者はそれをさらに簡潔化して、死者の實在感、怒りの感情、死者との運命の共同化、再会のヴィジョンの四点にまとめてみたうえで、この視点から藤原内観瞑想を読み解いていきたい。その際、藤原による素朴で直截的な初期の著作（『東西のはざま』および『心の内なる旅』）を考察対象とする。

第一の「死者の實在感」については、藤原の死後生観は一種の生前煉獄説であり、その死のリアリティは強く、内観瞑想の現場は「死境から眺め」として描写される。「去った人があたかも屏風から搭乗してくるかのような経験」とともに、生者がいわば生きながら死者となり、その境位で関係の連続性が確保される。「一人の内観者の後ろには何十・何百・何万ものひとが連なっている」のであり、しかも内観に発する強烈な罪悪感や負い目の自覚によって「心乱される」なかで、「他者によって私の隠れた闇を照らし出して頂いている」という内面の相互照明も主張される。こうした共同的な「陰府下り」へと導く機能を藤原はシャーマニズムや伴狂者などの痴聖に見出し、そこから司祭を世界離脱的で「パワーレス」な仲介者とする。擬似死体験の場でシャーマン的な司祭に見守られながら、「死者」同士の「聖徒の交わり」として一種の変性意識状態に到達することが目指されている。

第二に「怒りの感情」については、内観瞑想が生死を越境し